

進路選択をめぐるキーワード

この2時間を越えた模擬ゼミには、10名の高校生と3名の高校教師、そして2名の九州大学学部生（法学部2年と理学部3年）と2名の大学院生（理学府修士課程2年と生物資源環境科学府修士課程1年）が参加し、渡辺哲司（九州大学高等教育開発推進センター）がゼミ担当者の役割をとりました。

そして、この模擬ゼミの対話でテーマになったことをキーワードとして抜粋し、話題を要約するかたちで解説を試みています。

Key Word 選択（学部・学科、大学、職業）

「大学に進学するとして、どの学部・学科に進学するかの選択は、将来にかかわってくるので、とても難しい。」

学生 難しいから、好きな教科で学部・学科を選ぶ。そして、九州大学では、多くの学生が大学院へ進学しているので、特に迷うことなく、大学院へ進学した。高校生のときは、大学院のことなど想ってもいなかった。

大学院の修士課程を修了して就職するのは、マーケティングの会社だけど、高校生が大学で数学を学ぶことが、マーケティングの分野で活かせると想像するのは難しい。どこで生活するかを選択したわけではなく、就職する会社が東京にあるから、東京で生活することになる。

学生 大学院まで進学しても、知らない仕事はいっぱいある。将来、どんな仕事に就くかについて、高校生が選択するのは限界がある。入学した学部・学科によって、将来が変わると言っても、将来の何がかわるのか、よくわからない。将来について、つまり、自分の生き方について真剣に考えるのは、意味のあることだけど、学部・学科が生き方というか人生まで縛るとは思えない。

学生 進路選択については、多分、僕らはいつも考えている。就職しても、どの部署だと自分が発揮できるだろうかと考えるにちがいない。

学生 大学に入ったら、生涯を通じて、ずっと一緒にいられるような人達がいる、しかも同じような話が出来る人達に会いたってというのがあった。そして、入ってみて、大学はすごく贅沢な場所だと思った。本当にやりたいことが見つかった人には、とてもいい場所だと思うし、何も決まってないけど、何をやろうかと選択の最中にいる人にとっても、とてもいい場所だと思う。高校生の頃は、大学では、専門的なことをいっぱい学ぶのだと思っていただけども、実際は、専門はかじる程度で、教養をつけるというか、知性を磨く場所だ

という気がしている。

コメント この模擬ゼミに参加した九州大学の学生は、自らの関心事が見いだせる所、つまり、学び続けることのできる所が、選択する進路先のように。九州大学に入学して、人生は出身大学や学部・学科によって決まるわけではないと気づいたのでしょうか。高校生のときに、進路選択について思いをめぐらすのは、もしかすると、悩んでいる（葛藤状態にある）のであって、思考には至っていないのかもしれない。

Key Word 大学のレベル 人間性のレベル

「私は、キャンパスを歩き回ってみて、すごく驚いたことがあります。植え込みに空き缶が捨ててありました。九大というレベルの高い国立の大学なのに、空き缶をポイ捨てするような人間としてのレベルの低い人がいるのだと、すごくがっかりしました。レベルが高い人というのは、学問だけじゃなくて、人間として守らなければいけないことは守れる人のことだと思います。」

学生 僕は捨てないけど…まいったなあ…。

学生 皆さんが高校生であるということは、これから九大生になる可能性があるということですが、では、皆さんの同級生は空き缶を捨てないのでしょうかという話になる。私が18歳の時にそういうことをしなかったかという、多分したと思う。

「ぜひ、この大学に来てください」と受験生を募っている大学だと、おそらくオープンキャンパスの前には、捨てられている空き缶を拾うのだと思う。九大は、そんな売込みをするつもりがないから見栄えを良くしておこうなどと考えないのだと思う。それに、次第に植え込みに捨てられた空き缶が増えていくとも思えない。捨てる人がいれば、拾う人もいる。

学生 そもそも、大学にレベルがあるのだろうか、そして、人間性にレベルがあるのだろうかということを考える必要があると思う。それから、守るべきとされるルールと、人知れず自らに課すモラルとはちがう。

コメント 九大生に、「医学部生だと、頭は良いけど人間性が良いわけではないと言われるから、最近、ホームレスの給食サービスにボランティアで参加しているのですよ」と言う学生がいました。このボランティア活動の動機は、奇妙に思えます。受験学力が高ければ（おそらく）人間としての優しさや温かさに欠けるにちがいないという捉え方は、ある種の偏見であるにもかかわらず、偏見と相撲をとるために、ボランティア活動に参加しているからです。ところで、この医学部の学生は、人間としてのレベルが高いのでしょうか低いのでしょうか。何とも言い難いところです。自分には優しさが欠けているといった自覚があって、それを何とかしようと一念発起するのは、自らのことを人間としてのレベルが

高いと思っている者より、レベルが高いのかもしれませんが。

大学にレベルがあるとすれば、それは偏差値序列に由来するレベルだと思えます。ですから、九大のようなレベルの高い大学という言い方は、偏差値序列は現実社会に反映されていると信じているからかもしれません。現実というのは、人がそれぞれに決めているのであり、誰にとっても同じ一つの現実があるのではないのです。と、考える者が、大学には大勢います。

Key Word 進路の具体性

「先ほど、高校生の進路は大まかにしか決まっていなかったと言われましたが、私は目的意識がはっきりしているので、受験する大学はきまっています、進路選択は具体的です」

学生 たとえば、保育士になりたいという進路選択だけど、やはり、高校生のときに決めるのは早いと思う。早く進路が決まると、そのために頑張れるので、いいのだけど…でも、大学で学ぼうちに、保育士でなく、社会福祉士という進路が見えてくるかもしれない。大学は、進路の選択肢が増える所だと思う。

学生 いや、保育士になって働いているうちに、たとえば、社会福祉士のほうが、やりがいがありそうだと気づいて方向転換するのもいいと思う。魚屋になろうと思うかもしれない。

コメント 進路選択が早すぎることによって問題が生じるのは、仕事の実際を知らないままに、あるいは、楽しいことについての情報だけを集めて仕事を想像していることにあるように思えます。よく知ったうえで、進路を選択したとしても、もしも自分にはこの仕事しかないという決め方をするのは、どうかなあと不安です。私たちそれぞれの可能性は、意外なほど多様だと思えます。

Key Word 夢と進路

「夢に向かって進むということと、リアリティをもって進路を選択することとの違いが、よくわかりません」

学生 夢をぐっとリアルで現実的にしたのが進路であるように思えます。

学生 さしあたっての次の一步が進路で、遠い将来の、そこにたどりつけるかどうかもわからない目標が夢だと考える。たどりつけるなら夢ではない。

コメント 九大生が夢について語るのを耳にした記憶がありません。おそらく、九大生にとっての夢は、密やかなものであり、気恥ずかしいものなのだろうと考えています。もっとも、自らの適性や社会という現実を斟酌して、抱負や大志について語る九大生はいます。

夢は将来に賭けた何かですから、夢の実現可能性は、将来の社会についての予想なしでは語るできません。たとえば、20年後にNPOを立ち上げて、社会に貢献したいという夢なら、20年後の社会がどのような課題を抱えているかについての予想があり、予想される課題に自分がどのようにかわれるかと、これまた20年後に自分が培っている専門性や独自性についての予想も必要です。ますます高度化している社会ですから、20年後の社会の課題が何であるかを的確に予想できるようになるためにも、大学で学ぶことは有意義だと思えます。

高校生が夢として語ることで気がかりなことがあります。たとえば、「医師になって病気の人を助けたい」というのは夢ではないと思えるのです。職業と夢を重ね合わせるのは、混乱があるからだと思えます。医師になるというのが進路選択で、人を助けたいというのが夢に相応するように思えます。なぜなら、弱い人や困っている人を助けるというのは、医者でなくても、職業人でなくても、実現可能なことだからです。

Key Word 志望理由書

「志望理由書は、大学の先生に読んでもらって、その大学の先生が、この高校生は大学に入れたいとか、こいつと一緒に勉強したいとか、おれの研究に合っているなあとか、そういうふうに思ってもらうために書くもののような気がしているのですが…何も決めていませんとか、何も分かりませんとか書いたら、即、不合格ですよ。」

「この間、自分なりに書いた志望理由書を、高校の先生に見ていただきました。私は自分がやりたいことをとにかく書いたのですが、先生に言われたのは、具体的に何をしたいとか、どうしてもこの大学でなければならぬとかいう理由が書いてないから、志望理由書としては駄目だって言われました。」

高校生 書くことによって自分の考えを整理することができます。それまで、抽象的だった考えが、具体的に書いているうちに、自分の興味があることは、こういうことだと気づくこともあります。ですから、まず、自分の考えを具体的に書いた後で、それを大学の先生に伝えるにはどうしたらいいかということで、手直しをしたらいいと思います。自分が考えていることを、単なる思い込みではなくて、他人に理解してもらえるような文章にするのは、大切なことだと思います。

コメント 先生の添削や指導が入っているかもしれない志望理由書の文章がどうであれ、面接の質問への応答ぶりから、推察されることのほうが確かなように思えます。志望理由書を

書くにあたって傾向と対策があるらしく、多くの志望理由書が似たり寄ったりになってきつつあるのは厄介なことだなあと感じています。

志望理由書を書くことが、自己モニタリングの（自分が何についてどこまで考えているかを整理する）機会になれば、何よりだと思えます。大学生のなかには、自分はいろいろと考えているけれども、それを表現する文章力が足りないと思っている者がいます。しかし、どうなのでしょう。いろいろと考えているのなら、考えていることをそのまま文字にすればいいのですから、文章にならないということは、考えているつもりではあっても、実際には、考えていない（思考していない）のかもしれない。

Key Word 学歴 ゆるぎないもの

「受験勉強をしながら、こんなことをして何になるのだろうと思うことがあります。受験勉強を一生懸命して学歴を手に入れるよりも、何か、ゆるぎないことを獲得するために勉強をしたいと思うのです。」

学生 ゆるぎないものっていう言葉が出たけれども、ゆるぎないものって、はたしてあるのだろうかかなあと疑問に思う。ゆるぎないものがあると思いたいだけじゃないかと。ゆるぎないものを見つけたときは、要するに、思考が停止するのではないかと思う。九大で学んでいて、ゆるぎないものを持っている先輩や先生には、まだ、出会っていません。高校生の段階で、ゆるぎないものを求める、求めたいのは分かるのですが、それは、すごく難しいことだと思う。誰か突っ込んでください。

学生 ゆるぎないものは、実際に、ないのかもしれませんが。しかし、高校生が求めている、ゆるぎないものというのは、たとえば、公務員が首を切られることがないというのは、経済的に他の職種よりは安定しているという程度のゆるぎなさだと思う。公務員だけでなく、一流企業だとしても、ある程度のゆるぎなさがある。

コメント ゆるぎないことがあるとするなら、それは、人間は全知全能ではないということかもしれません。だから知的な探究に汲めども尽きせぬ面白さが生じていると思えます。そして、大学の魅力のひとつは、そのつもりになれば、知的な探究を思う存分にできる場だということです。

自分が本当にやりたいことも、もしかすると高校生が思い描いているゆるぎないことのひとつだと考えますが、本当にやりたいかどうかは、やってみないと確かめようがなく、実際に、やってみると、こんなはずではなかったと、自らの智慧のなさに気づいたりします。無知な自分が愛おしくなる可能性があるのが、大学かもしれません。社会では、私は決して無知ではありませんと言い張らなければならないのかもしれませんが。

学歴偏重は問題があると言われながらも、学歴に対しては信仰のような根強さがあるのは、学歴が、他者との比較によってですが、それほど無知ではないことの簡便な証として

重宝されているからかもしれません。学歴には、それほど無知ではないというメッセージが込められていて、かくも智慧がありますというメッセージにはなっていないようにも思えます。

Key Word 研究者

「研究者というのを考えると、新たなことを発見して、大学だったら、教えるだけじゃなくて、自分のやりたいことを研究できるし…」

「僕の兄が、今、博士課程の3年で、来年、就職することが決まっています。兄は努力家でもあるのですが、研究が楽しくて、毎日夜中の2時とか3時に帰ってきます。家には、寝るためにだけ帰ってきているような感じです。でもそれが苦痛じゃないし、すごく楽しそうなのです。研究室に入る前にやいたかったことを研究しているわけではないのですが、兄は、研究そのものが楽しいと言います。人が知らないことを解明するのは、楽しいのだろうと思います。ですから、僕も、できたら研究者になろうかなと思っています。」

学生 学生としての楽しみというのは、知的好奇心をかきたててくれる人と会えること。僕は、考えよう考えようとして努力しているのではなく、大学でさまざまな研究領域の人たちと出会うと、考える起点になるような課題が、次々に見つかる。このことが、大学ならではのことだと思える。就職すると、また、知的好奇心が刺激されるのだろうけど、大学では、というか、学生であると、見つけた課題に取り組む時間が、潤沢にある。時間配分を自分で決めることができるのは、学生であることの楽しさになっていると思う。

コメント 研究の何であるかについては、23頁に掲載してある、模擬ゼミを担当した渡辺先生の紹介を参照してください。